慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『いつく島御縁起（上）』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.19 (1993. 12) ,p.35- 42
JaLC DOI	10.14991/002.19931200-0035
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19931200-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『いつく島御縁起（上）』解題・翻刻

石川　透

解題

室町物語『厳島の本地』は、松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』）に、十七本の伝本が紹介されている。本地物の作品群は、江戸時代中後期にも多く写されているから、これら以外の写本も現存しようが、ここに紹介する写本は、江戸初期の写しと思われるものである。残念ながら後半を欠くが、冒頭に諸本にはみられない序文のような記述がある。本書を書写した時に書き加えたものであろうが、本地物系室町物語の巻末によくみられる、

　此ほん壱年に一度二どよめは、子そんはんせう、後生までうたかいなし。

というような内容もあり、興味深い。本文は、「現存本簡明目録」にいうC系統に属し、やはり、諸本とは異なる点がみうけられる。

本書の書誌は、以下の通りである。

所在、架蔵

形態、袋綴、一冊
時代、［近世初］写
寸法、竪二三・八糎、横一七・〇糎
表紙、欠
外題、なし
内題、「いつく島御縁起」（本文別筆か）
料紙、斐楮交漉紙
丁数、二〇丁
行数、九～一一行
字高、約二一・〇糎
印記、なし

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」括弧・欠損による不読記号（□）等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

本年二月、松本隆信先生が亡くなられた。昨年十二月に、最期にお目にかかった時、架蔵の何点かを御覧いただいた。『厳島の本地』は先生も御所蔵のせいか、本書を「近世初期でいいでしょう」とおっしゃりながら、しばらく御覧になっていたことを思い出す。私事ではあるが、付け加えさせていただく次第である。

いつく島御縁起（上）

そも〳〵、此ほんは、あきの国厳しまの御ゑんき、むかし、ほうけん二ねん三月十六日に、平家のあつそんそうこくきよもり、いつくしま御宮作りを思召たつ。ころは、みきにかきしるすなり。此ゑんき、御ほうてんに、かきおさめ給ふなり。ころは、ちこうくわんねんなり。此ほん、おんなおつとによらす、あしき足あしき手なとにて、いろふへからす。うたかいてある人は、しそんをたやし、その身にあしきやもふをさつけ給こと、うたかいなし。されは、大明神御ちかいにも、我ねんするともからは、かうせんのふつき、しそんはんせううたかい有へからす。せうえんの弁才天とけんし、一切衆生のしやくわん、なんそまんそくせさらんや。諸仏のちひのほんぢなれは、くわんおん大し大ひの御せいくわんこそ、よにすくれおわします。あくまをはらい、諸仏たう仏法をしゆこし給ふこそ、たのふるゝてんすくれたりとて、いつくしま大明神とけんし申成り。此ほん一度よみ、又人にほとこす人は、十と御まへにさんけいしたるよりも、まされりとの御せいくわんなり。女の身にて、さい〳〵御まへに参り申事成かたし。此ほん壱年に一度二どよめは、子そんはんせう、後生まてうたかいなし。ふつきと成なり。

さる程に、いつくしま大みやうじんと申奉るは、我かてふすいご天皇のきやうに、たんせう五年甲さる、十二月十三日、につほんあきつしま、せんやうとう、あきの国さゝいのこうり、とかけのむらに、衆生さいとのために、あとをたれたまふ。

かの大みやう神の御本地、くわしくたつね奉るに、むかし、てんちくに、十六のたいこく、五百の中国、十せんのせうこくは、□りやうそくさんこく、其中に、一の国あり。と□せう国となつく。一人のわうじあり。御□□とうせんわうと申ける。

天ぢくのならひにて、□□のきさきます。此君、大りを立給ひ、壱□つゝ、日をかゝさすみゆきなしせますに、三月中しゆんのころにや、なんてんに立給ふ、四方の気々をくわんしますに、しやくせんたんのみそきなる枝に、つはさ、すをかけたるを御覧して、「あわれ成るかな。生れて七十五日、わかれてのちは、おなしはをならべす。むまれぬれと、親子のたぐひを知らす。いわんや、まろは、たい国の皇として、千人のきさき持なから、今まて子のなかるらん」と、仏神にいのり給ひけるに、一人のきさき、御くわい人にならせたまひ、月のかすつもり、御たんせう有。わうしにてそまし〳〵ける。

すでに七才にて、御位につき給ふ。御名は、せんさいわうとそ申ける。十三と申には、大国のならいにて、先百人のきさきをそなへ奉るへきせんきあり。

また、此君には、八十二代つたわりたる御たからあり。別のものにてあらす。扇にて候成り。三つのゑあり。壱つには、ゑながら大千世界目のまへにかき、一には、こんていのほけ経をかきうつし、一には、天下だい一のみめよき女房を書うつす。

此わうぎを、大皇、御手をはなし給ふ事なし。何としてか、しばらく御手をはなしておかせ給ひけん、せんさいわう、とり給ひ、たゝ一め御覧しければ、誠にうつくしさかぎりなくおほしめし、はやくくらいをうけとり、此わうぎを我か侭にせはやと思召。

扨、此わうきの中の女房、御こゝろにかゝり、御のふとならせたまひ、すてに、日数つもりけるに、大りのさわぎと成る。大わうもきこし召、大きになけかせ給ふ。「何事にて、わつらわせたまふにや」とせんじあり。是は、扇の中の女ほう、うわのそらにこひたまい、人知らすして、日数すきさせ、くきやうてんに、人常には参り、くわんかくをはしめ、なぐさめ奉る。

扨も、くわげん過ぎけれは、御口すさみ候つるを、有臣下聞とゝめ、大りへ参り、大わうへ申奉る。「いかにや、聞しめせ。せんさいわうの御のふ、べちの御のふにてましまさす。こよひ、くわんかく候つる、御口すさみに、まさしく恋の御こゝろと見へ奉る」と申ければ、大わう、聞しめし、「やすき事。たとへ、此大王、千人のきさきの内にてもあれ、又は、天下ならびの国の事ならは、たつねてまいらせ候へし」と、せんじ有けれは、是は扇のゑを恋給へは、御へんしなし。

去程に、有しんか、申たてまつるは、「扨も、此扇のゑ女房と申奉るは、いにしへのびしやもんの御妹、きちじよ天女と申人を、うつしかきたるとや承る。夫は、いにしへの事。いまは、なのみ残りてぬしはなし。おもひ留り給ふべし。扨も、是よりにしに国あり。其国の皇の御名は、てん一ほうとそ申。三はんに当りたまふ姫宮と申こそ、天下第一のみめよき女房とは申」と語り奉る。

扨も、御のふかぎりと見へ給は、又、君に八十二たびつたわりたる御たからに、つばさの候けるが、かしらはしろく、ははくろく、身はあおし。はしはあかし、足はき成り。五しきなれはとて、五てうとは名付けたり。

扨も、せんさいわうの御まへに、かの鳥参、申けるは、「いかにや、我か君様、何おかさのみなけきましますそ。そも〳〵、かのさいぜう国とのみちは、六年なり。行かへり十弐年、おもへはやすき間なり。去ながら、此道は、海上まん〳〵として、壱ところにても、やすむへきたよりなし。其上、我は御身一のたから成り。我むなしく成るならは、きみ大事成り」と申けれは、いよ〳〵御なけきとなり給ひける。

おりふし、うづきのはじめ、山ほとゝぎすの、くもいはるかにおとつれは、

さつきやみおとづれてゆくほとゝきす
恋ひするまろに声なきかせそ

と、かやうになけきたまへは、五てう、見奉り、又、御前に参りて、申やう、「あさらは、御たまづさをあそはせたまいて」申けれは、せんさいわう、「なんじ、われに一大事のたから成り。いかゞあるへき」とおふせけれは、「かやうの御たびぢに、きみに命をたてまつるも、おなし御事成り。十二ねんの間、せ

つなの事なり。たのもしくまち給へ。いそぎ、御玉づさをあそはせて、下され候へ」と申せは、なのめならずに御へいらんあり。こうろきの墨すりながし、筆を染め、くれないのたんし、引かさねて、一紙を遊ばしける。

くさにだにまた見ぬ人の恋ひしきは
むまれぬさきのちきりなりけり

行ゑ知らすとあそばして、五てうにたまわりける。五しよ、うけ取、ひたひのはがひにおさめ、御ぜんをたちぬ。

さて、かのたびにおもむき、とびゆく程に、海上まん〳〵として、くものなみ、くむりのなみをしのぎ、ひるは、日の入方をにしとおもひ、夜は、しそうのほしのめにかけて、あけくれとひゆく程に、都を出て五十日と申に、にしよりふきくる風はげしくて、はかひもさがり、身もつかれ、こゝろもよわく成りけれは、「我は是、とうせう国のせんざいわうの御つかいなり。いかてか、せんしを、むなしく此かいていのもくずとなすべきや。たよりをあたへたまへ、龍神」とよばわりけり。

龍神、あわれとおぼしめし、まんこうのとしつもりたるりやう、うき出て、島と成る。五てう、はをやすめ、こけをむしりて、うゑをやすめ、又とひゆくほとに、八十五日と申には、西せう国へ着にけり。

扨も、天一わうの大りへ参り、はなそのしたに、三日遊ひける。三日と申早天に、なみのかすみと申にやうぼう、是を見て、あし引の宮へ申やう、「いまだ見なれぬ、うつくしき鳥、はなそのに遊ひ申」。

姫宮、みす打あけさせ、御覧し、「是や、此仏の国有と聞、くじやく、おうむ、かりやうびん、きんしやてうとは、是や覧」とおほしめし、彼五てう、文を御まへにおとし奉れは、ひめみや、何となくとりあけ、御らんじけれは、なんゑんふたいせう、あめがしたにまします、せんさいわうの御たまつさ成り。

「中〳〵返事したりとも、此世のちぎり有へからす」と、ありけれは、また、ある女たち、申されけるは、「うたのへんじなき人は、七度、口なきむしとむまるゝと申成り」、御返事、

ますかゝみかげみなからにこかれきて
我か身もそらに成りぬへきかな

とあそばし、又、五てうにつけたまへは、御前をたち、さきのいわのこけ、くすりとなり、ちからも付て、百七十日と申に、とうぜう国へそかへりける。

せんさいわうに、せんし奉る。なのめならすに悦びて、御ゑいらん有に、誠にうつくしく、もじのならびもなつかしくまします。いま一しほの御おもひまし給ふ。たゞおふよりほかのくすりはなし。いよ〳〵御のふおもくならせたまふ。

春夜の御夢に、千人の大工めしよせ、千本のくわの木切り寄、本切のふときにては、くぜいの舟を作り、すへのほそきにては、忍びのくるまを作りたまひて、くるまには天わうめされて、五てうはながへに参りたまはゝ、舟もくるまも、ばん里をとぶべしと御らんして、ゆめさめにけり。

せんざいわう、なのめならすによろこひ給ひて、千人の大工を召寄せ、千本のくわの木をきり寄て、程なく、くせいの舟、くるまを作り、舟には、くきやうしんかのせ、くるまには、天皇めされ、五てうのなかへにまいり、はるかのなみぢを行たま

へは、百十万のいかつち、おちかゝることく、なみ風あらくふきけれは、せんかたなくおほしめし、龍王へ申給ひけるやう、「我は、これ、とうせう国のあるし成り。龍神もあわれみたまへ」とありけれは、浪かせしつかとしづまりて、舟もくるまも、さいせう国へそ着にけり。

さても、てんにちわうの、ひるねおめされし御ゆめに、としのよわひ、二十ばかりのしやうろうの、けんわうのおもひにうちしおれたるふせひにて、うちのほとによりかゝり、なみたぐみたまいてわたらせたまふと、御らんして、うちおとろきたまへは、また、めしつかわせ給ふ、しつのめ、物につひて、てんちにふして申けるは、「いかにや、我かきみさま、かくうちとけてまし〳〵候そ。とうしやこくのせんさいわう、此ごすひてんにおわします、あしひきの宮お、こひかねて、たゝいま、わたらせ給ふなり」と申せは、てんわう、きこしめし、御むさう、しつたくせん、おもひあわせてはんへり。これは、なたかきわうときこしめすとて、大りおたてたまひて、いろ〳〵の御まふけとり待給ふ所に、しつか申ことく、くるまをはゞからす、なんりやうてぬに入たまふ。いろ〳〵の御もてなし、かきりなし。

此ほとの御いのり、御神楽、七日に、又御もてなしかきりなし。くわけんすきけれは、ごすひてんへ御つかひ有。御返事は、「いま三ねんはかな候まし。みせのしよふつへ、たひくわん候」とありけれは、大わう、きこしめし、「あるましきことなり。はるかにわたらせ給ふきみを、いかてか、久しくおきまひらせ候へき」とて、一日はかうしをへたて、二日はみすおへたて、三日はおなしきちやうへわたらせ給ふ。

さても、御ちきりあさからす、てんにあらはひよくの鳥、ちにあらはれんりのゑた、かみならはむすぶの神、あひせんめうわうとちきり給へは、三年のすぐるはゆめなり。

くきやう、しんか、申されけるは、「いかに、我かきみ、すてに、とうせう国おいてたまひて、三年にはやなりぬ。とう国には、きみ御かへりなきとて、天下のなけき、国のさはきにて候はん。あわれ、くわんきよあるへき」よし申されけるに、「ひめ宮にはなれて、かたときもあるへからす」と、せんしあるけれは、五てう、まいりて申やう、「きみわ、十せんまんしやうの御身にてまします。なにとも御たはかり候はぬそや。ひめみやおすかしまひらせ、きみくわんきよあらは、さためて、たひの御いのりの御かくらとて、なかゐしところの御まつりことあるへし。そのまきれに、「我か国へわたりしとき、のりてまいりたるくるまの、たくみおも御覧せよ」と、御ものかたりにて、ひめ宮の御手に手をくみ、くるまへのせ参らせたまわは、くきやうしんかも忍ひ出、舟にのりたまふへし。五てう、なかへにまいり候へし」と申せは、「そのき、しかるへき」とて、いろ〳〵すかしたてまつり、くるまに引のせ、舟も程なくいてけれは、ひめ宮は、「こすひてぬをいてゝ、おそくなり候。かへらん」とのたまひ、御くるま、ものみ、ひらきてみれは、かいしやうまん〳〵とかや、これを御覧して、「こはいかに。われをは、いつくゑともなひゆくやらん。あわれみのちゝ、かなしみのはゝをふりすてゝ、これはいか成よの中そや」と、たへいり、こかれなきたまふ。

せんざいわうは、「あわれみのちゝとも、かなしみのはゝと

も、我をたのみたまい候へ」とて、いろ〳〵すかしなぐさめたてまつり、なみのはるかにすき、かの五てう、ひとはあをげは、ふねもくるまも、ばんりをとふことくなり。日数つもり、はや、とうせう国へつきにけり。

やかて、なんてんに御くるまをすへ、物見うちあけ見給へは、さいしやうこくは、くもいはるかに成りにけり。ひめみや、なけき給ふにちからなし。「われちゝ大わう、はゝきさきのおゝせに、「いきてのきやうやうには、いちにちにさんど、我にすかたを見せたてまつるへし」とおゝせありつるに、父母の御なけきをは、いかゝすへき」と、天にあをき地にふして、かなしみたまふ。いまは、なけきてかいもなし。ちゝ大わう、はゝきさき、たひのそらの御いのり、御かくらはしめ給ふ。

さる程に、とうせう国の大わう、おゝせられけるは、「千人のきさきたち、日をかゝさす、五十人つゝゆきたまひて、なくさめ給へ」とありけれは、きさきたち、ゆきて、見まいらせたまへは、まことに、あたりもかゝやく程のことなり。御すかたお見れは春の花、かたちを見れは秋の月、十はらとをのゆひまても、るりをぬへたることくなり。

さて、千人のきさきたち、寄あつまり、おゝせけるは、「此きみ、大わう、御らんじて、我らはものゝかすならすなるへし。大わう、御らんせぬさきに、なにとして、うしない申さはや」とて、てんにあをき、せんきし給ふこそふしきなれ。

扨も、御すかたをつくりあらわし、あかきころもをきせ、七しやくにあなをほり、さかさまにうつめ、たけのたかきおんなを、かみをきり、大わうにはなし、ときもつくりて、てうふくしたまゑとも、とかなき人なれは、あひたまわす。

その中に、せんざいわうの御はゝ、「我は、みめわろくことは、せん〳〵のつみふかきゆへなり」とのたまへとも、千人のきさき、とうしんにすゝめけれ、ちからなくしておわします。

さても、まかたこく、はらないこくのさかい、ゆきかた五十年、すきしこと五十年お、かゞみにかけて見るやうなる、はかせをめしよせ、おゝせけるは、「われら千人、こと〳〵くそらむねをやむべし。其時まいり、うらなひ申へき」、くわしくおしるゑふくみたまへ。

千人のきさきより、一ひきのきぬ、一りやうのこかねをいたし、かのそう人につかわしける。むかしもいまも、よくにまかせぬ物はなし。りやうしやう申てかへる。

千人のきさきたち、一とにむねをやみ給ふ。大り、物さわかし共おろかなり。大わう、おゝきにおどろきて、千人のきさき、申されけるは、「まかた国とはらないこくの境にこそ、誠のそう人あり。かれをめしよせ、うらなわせたまへかし」と申されけり。

やかて、おんみやうしおそ、召れける。御たつねにより、かねてこしらゑたる事なれは、「此御やまいは、大事也。拾弐年には、かならす、皆すぎさせたまふへし。此くすりに、これよりほつこくに、きまんこくと是をゆふ、鬼のすむ国也。きまんこくとなつく。かた道六年、ゆき十二年也。彼国山あり。ちやうさんと申おゝる。やくしそうと申くすりなるくさ、これは、おにか、たい一のきうとす。これ、たゝ人のとりたまわんか、くすりに成へし」とそ、うらないける。

大わう、きこしめし、せんさいわうへちよくを立、はかせうらない、くわしく物かたりある。たゞ壱人のきさきおもひに、千人の命をかへさせたまふへしか」と、なけきたまへは、せんさいわう、きさきたちの御たくみは、ゆめも知りたまわす。大わうのちよくめいにそむく事かたし。

我か大りへかへり、きさきへ、此よしのたまひて、其時、ひめ宮おゝせけるは、「御身壱人ならては、たのむ人もなし。我はたれにあつけ給ふそ。我をもともないましませ」とありけれは、せんさいわう、「されはこそ、此たひと申は、行き十弐年なり。おにの住国なり。夜ひるがひまなし。此くすりをは、みめよきおとこ千人に、替りて取とうけたまはる。御身壱人しては、叶ひたまふへからす。きこくよりかへりたまふへき事かたし」とて、かなしみこかれおはします。

大わうのせんじなれは、そむきがたくおほしめし、「十二年、ゆきゝおもへは、ゆめかならすまちたまへ。頓而、帰り見まいらせん」と、御こゝろつよくいてさせたまふ。

きさき、なみたにむせはせたまい、一しゆ、

かへるともかひもあらしなしらなみの
たちなんのちはきみと見るへき

とて、ふしまろひたまへは、せんさいわう、御へんしに、

いまこんと思ひていするわかれたに
かなしかるへきけさのあさほの

と、あそはして、きやうこうならせたまふ。

扨も、千人きさき、なのめならすによろこひて、あさかゝいと申わらんへをかたらひ、かすの小袖とらせ、「せんさいわうの大りへまいり、此うたゑいじあるくへし」とおしへたまふ。うたにいわく、

あさか山ひかりさやけきたまのゑに
しばしのかけをやとるひめ宮

きさき、おしへのことくに、彼あしひきのなけき給ふたいりへ参り、常に此うたをゑいじけり。

扨、千人のきさき、引つれて大りにまいり、おゝせけるやうは、「おんなほとなる、つたなき物はなし。きのふまて、せんざいわうのすみたまふ大りへ、あかさ山をいれ、ふみけがしたまふ」と申されけれは、大わう、「あるましき事かな。父母、こきやうをふりすてゝ、壱人たのみたまいし、せんさいわうにもはなれ、なけきの中成り。五十人三十人つゝも、よりあい、なくさめ、ともない奉れ。ことはなく、けつく、しんしつなき事をゆひつけ給物かな」とおゝせけれは、ほひなけにて、おの〳〵かへりたまひぬ。

扨、いかゝすへきとて、あんしわつらい給ひける中にも、あるきさき、申されけるやうは、「あらけなき物の手にわたし、うしない申さぬ」、「もつとも」とて、六人めしつれ、いろ〳〵の御小袖つかわされ、「扨も、よきにうけたまはれ。せんさいわうの、ふすまのせんしをかなて、これよりはつかにゆきつく、しん山あり。からひくせんと是をゆふ。其山に、きんとうかみね、じやくまくのいわと申所へ、引上け、くひきりてまいり候へとのせんしなり」とて、ことかうしと申つるぎ給はりけり。

さても、物のふ、せんさいわうの大りへ、参り申けるは、「いかにや、きさき、きし召せ。すてに、大わうの、ふすまの

せんじにて候。とく〳〵此大りをいてたまひ候へ」との申やうなり。

きさき、聞召、「これはゆめかや、うつゝかや。何と成りゆくよの中そや」と、かなしみおはしませは、ものゝふ共、「ぢこくうつしてかなふまし」とて、すてに、大床に上り、にしきの御しとねをふまんとす。

きさき、御覧して、「いかに、たしかにうけたまはれ。我か身こそ、くわほうつたなき身なりとも、きのふまては、一天の君のすませたまひし玉の床を、なんちらは、いかて、けかすへき」とて、十二ひとへのくれなひのはかまのそはおとり、こんていのほけきやう、五のまき、はんくわん計よみかけて、御手にもちたまひて、いてさせ給へは、十五やの月の、山のはいてたまふことくなり。まことに、あたりもかゝやくはかりなり。御ても、ひすひのかんさし、たまのすたれにかゝりて、ひかへさせ給へは、はつしたまふとて、御なみたの下より、一しゆ、

（終）